

日本學藝新聞

復刻の辞

◎『日本学芸新聞』は、昭和一〇年に通信社・新聞芸芸社の機関紙として創刊された。本紙は、中里介石の『大菩薩峠』、広津和郎の『女の敵』など数多くの作品を世に出したジャーナリスト・川合仁の編集による文芸批評紙であり、同時に文字通り文壇の「通信」となっている。

◎本紙が刊行されていた昭和一〇〜一八年という時期は、いうまでもなく太平洋戦争前・日中

昭和10年代の文壇状況を鮮やかに映し出す
幻の文芸批評紙、完全復刻！

戦争の最中という、まさに不穏な空気の張りつめていた時期であり、文壇及び文学者が文学そのものを問われていた時代であった。

◎本紙に執筆・登場する人物は多数・多様で、大宅壮一、辻潤、戸坂潤、清水幾太郎、宮本百合子ら約一、五〇〇名、その多くが戦前から戦後を通じて文壇形成に大きく寄与した主要作家・文芸評論家ばかりで、当時の作家で本紙に登場しない作家はないといっても過言ではない。ま

日本学芸新聞

◎全三巻【昭和10年→昭和18年】別冊・付録「不二出版」



た、その文壇・文芸批評は昭和一〇年代の文壇の状況を鮮かに映し出していて興味深い。

◎本紙は言論統制下にあつて、文学・芸術の自由を訴えた数少ないジャーナリズムであつたが、一九四二年八月発行の二三六号より、同年五月に発足した日本文学報国会の機関紙としての役割を果たすこととなり、やがてそれは『文学報国』へと引き継がれる。

◎このように時代に抗しながらも時代の要請に応えずには存在しえなかつた本紙の歴史は、昭和一〇年代文学を研究する上で、日本の近代文学の良心と限界と苦悩とを指し示す重要な資料といえよう。本復刻が戦前期文学の空白を埋める資料の発掘として、大きな意義を持つことを信じるものである。

昭和一〇年代の貴重な学芸資料 尾崎秀樹

『日本学芸新聞』は、川合仁の経営していた新聞文芸社の機関紙『新聞文芸通信』を改題して一九三五年一月に刊行され、月刊から旬刊へと発展、戦時下の統制による合同などを経て一九四三年七月までつづいた新聞である。最後の一年ほどは日本文学報国会機関紙となり、やがて『文学報国』と改題される。

もともとは新聞に小説や学芸記事を提供する通信社の機関紙だが、川合仁はこの『日本学芸新聞』に商業ジャーナリズムに毒されない学芸紙の夢を托しており、それは創刊時の顧問の顔ぶれ——徳田秋声、佐藤春夫、青野季吉、村松梢風、加藤武雄、浅原六朗、土師清二、新居格、戸坂潤、邦枝完二、沖野岩三郎を見ても明らかだ。編集には伊藤永之介も参加した。発刊の辞の中で佐藤春夫は、学芸の解放のために力を尽くすことを望むといい、戸坂潤はますます多忙化する現代人の日常にとって学芸新聞の存在は貴重だし、単なる事情紹介にとどまらず、ジャーナリズム批判にも期待したいと述べている。

私は昭和一〇年代の文芸事情を調べるに際して、この『日本学芸新聞』を一五五号の全号にわたって眼を通したことがあるが、他の新聞・諸雑誌からはうかがえない当時の諸事情・諸情報がたつぷりと盛りこまれており、時代の抵抗線とでもいったものが感じられるが、同時に状況の推移につれて日本文芸中央会や文学報国会との関係が強まってゆく曲折をもうかがえる貴重な資料だ。

戦時下知識人の生き方を探る 稀覯資料 松尾尊兌

十五年戦争下知識人はどう生きたか。それは歴史だけではなく、現在の問題である。戦時下の抵抗から協力にいたる多様な生き方は、現在のわれわれの生き方の鏡として存在する。「この国の学芸界のあらゆる動きを敏速、正確にとらへると同時に、特殊な学芸ジャーナリズムをつくり出して行き度い」との抱負をもって蘆溝橋事件の二年前に発売した『日本学芸新聞』は、戦時下知識人の生き方を探るのに不可欠の資料である。

初期には青野季吉・向坂逸郎・戸坂潤らをしばしば登場させ、ファシズムへの抵抗の一翼を形成し、日中戦争下もなお、中野重治・宮本百合子らに紙面を提供することがあったが、太平洋戦争の勃発の年には統制団体日本文芸中央会の、さらに翌年には文学報国会の機関紙となる。この性格の変化にもかかわらず、否、その変化のゆえに、この新聞は非常時および戦時下の学問と文芸の様相を物語る貴重な資料となる。

新聞・雑誌・文化団体・個々の知識人の動静についての貴重な情報は、首都東京にとどまらない。梶井基次郎の親友で、ブルーストの紹介者淀野隆三が戦後京都民主戦線の結成に関係したことに興味をもつ私は、本紙一九四二年九月一日付で、彼の「市会議員になつて」を読み、彼が翼賛議員であったことを初めて知った。文学報国会では、彼が京都の、織田作之助が大阪の連絡主任となっている。

ジャーナリズム史に造詣の深い香内三郎・信子夫妻の懇切な解説を付して、この稀覯の資料が復刻されることは、研究者にとっての慶事にとどまらぬ意義をもつものといつてよい。

↑
おさき・ほつき
作家・評論家

ファシズムへの抵抗の想いと 伝統を継承した新聞 日高六郎

一九三〇年代に生を送った知識人、学生にとって、「学芸」という言葉は、独特のひびきをもっている。一九三三年、ヒトラー・ドイツの文化破壊と、それに連動するかのような日本当局の動きに抗議して結成された「学芸自由同盟」。また、雑誌『唯物論研究』が抑圧され、解体しかかる末期に、誌名変更したのが、やはり『学芸』である。

今は別になんの変哲もない言葉であるが、その当時の人びとは、この言葉に、時代的な想いをこめていた。戦争とファシズムによる文化圧殺に抗する、人間として守るべき最後の拠点、といった意味であろうか。

『日本学芸新聞』は、その想いと伝統を、困難な情況のなかで継承し、少しでも呼吸の出来る言葉の空間を拓けようと努力するところから、出発した。当時学生であった私も、ある種の期待と興味をもって、この新聞を読んでいたことを、思い出す。

三〇年代後半のジャーナリストは、たえず自己の媒体を潰すか、存続させるか、の岐路に立たされている。第二次大戦まで続けたこの新聞の運命は、大変に苛酷なものであった。それだけに、紙面には、戦争に入って行く日本の知的世界の足どりが、克明に写し出されている。

↑
ひたかろうろう
京都精華大学
講師

いま再び、学問・芸術——人間の生き方をふくめた文化の総体が、装置の新しくなった舞台で争奪の的となっている。この新聞の軌跡から、われわれが学ぶことは、決して少なくない。

↑
まつおかよし
京都橘女子大学
教授

戦時下文学研究の第一級資料 杉野要吉

『日本学芸新聞』は目下私の座右にある戦時下文学研究の第一級の研究資料の一つである。ただし私の手元にあるのは第一〇四号以降の縮小複写版から再複写した資料で、それを虫眼鏡を使つて読んでいる。私の資料の親は小田切進氏所蔵のもので、おたずねした時、それは真白なボール箱に大切に納められてあった。それを私は何年間にもわたつてお借りし、「細目」も編んで、進行中の仕事に生かしてきたのである。

私の関心からいえば、この新聞がきわめて貴重なのは、日本文学報国会の成立過程からその結成を経て、やがて本紙が文報機関紙に変身を強いられ、ついには『文学報国』に機関紙の座を明け渡して終刊するに至る激動の戦時過程において、文学者のみならず、国文学者、外国文学者らが一丸となつて結集し、「思想戦」を展開してゆくことになった、当時の多岐にわたる歴史の一齣、一齣を、本紙が、客観的な事実のレベルで、きわめて豊富に、正確に、記録している点である。

本紙を用いた秀れた研究としては尾崎秀樹氏の「大東亜文学者大会について」(『文学』昭和三六年三月)が私には忘れられないが、近年のアジアへの私たちの関心ということも含めて、本当の意味での戦時下の実証的研究はこれから始まるといつてさしつかえない。

こうした時期に『日本学芸新聞』の復刻版が出ることは何と嬉しいことだろう。私にしてももう虫眼鏡など要らなくなるが、何よりも、この資料を、今後の戦時研究を担う若い学徒らが活用することを私は望むのである。

↑
すぎのようきち
『群』同人・
早稲田大学教授

日本学藝新聞

社 藝 文 新 行 師 賢
社 址 東京市丸の内區外神田區
支 店 東京市丸の内區外神田區
支 店 東京市丸の内區外神田區
支 店 東京市丸の内區外神田區

發 刊 の 簡 略

わが社がこの界に出でたのは、いつばに
しました。
廢して新に「日本學藝新聞」を發行すること
が社は一段の飛躍の期に達したので、これを
これまで「新聞文藝通信」を發行して來たわ
だと思はれることを注意して、これを
けることである。そのした所載
に關して三選するものである
と思ふ。フランスなどにはそれ
で立派にやうな行つてゐるもの
があるではないか。
吳々もこれであつた點の
文藝新聞とは非常に違ふ異にし
たものであつて、ほいのである

間を持ちたいためであり、まづ持つ必要があ
ることを痛感したので、日本學藝新聞にはいま申上
したが、近い將來においては、旬刊に、次いで
週刊に、さらに進んで月刊に、次いで、
たいとの抱負を抱いておられます。
而してそこに、この國の學藝界のあらゆる
動きを敏速、正確にとらへると同時に、特殊
な學藝チャリスマをつくり出して行き度
と念じてゐるのです。

この大きな抱負をまへにして、わが社の微
力よくこれに堪へようや否や、それは一にか
かつて、學藝界の先進及び諸君の援助鞭
撻に存します。何卒、微力ながらが社をして、
その抱負を貫徹せしめて下さい。社員一同、
に打ち込むことをよく文化的に意義のある仕事
に打ち込むことをよく文化的に意義のある仕事
に打ち込むことをよく文化的に意義のある仕事

新しい必要を指
日せよ
十一月五日
新聞文藝社

新 居 格



「新居格」の
「新居格」の
「新居格」の
「新居格」の



佐藤 春夫

學藝の解放の爲に

學藝の解放の爲に
學藝の解放の爲に
學藝の解放の爲に
學藝の解放の爲に



松村 梢風

松村 梢風
松村 梢風
松村 梢風
松村 梢風



青野 季吉

青野 季吉
青野 季吉
青野 季吉
青野 季吉



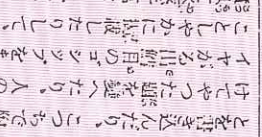
加藤 武雄

加藤 武雄
加藤 武雄
加藤 武雄
加藤 武雄



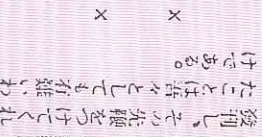
伊 野 岩三郎

伊 野 岩三郎
伊 野 岩三郎
伊 野 岩三郎
伊 野 岩三郎



伊 野 岩三郎

伊 野 岩三郎
伊 野 岩三郎
伊 野 岩三郎
伊 野 岩三郎



伊 野 岩三郎

伊 野 岩三郎
伊 野 岩三郎
伊 野 岩三郎
伊 野 岩三郎

伊 野 岩三郎
伊 野 岩三郎
伊 野 岩三郎
伊 野 岩三郎

伊 野 岩三郎
伊 野 岩三郎
伊 野 岩三郎
伊 野 岩三郎

◎主な執筆者

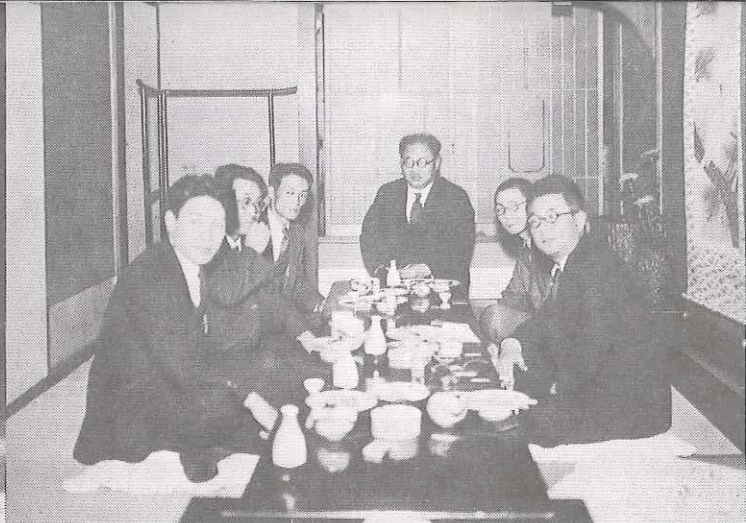
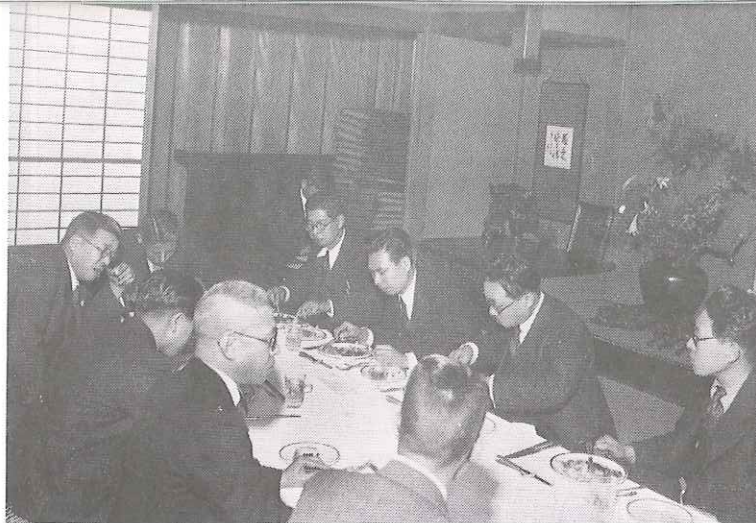
青野季吉	赤松克麿	秋田雨雀	浅野 晃
阿部知二	網野 菊	飯田蛇笏	伊佐秀雄
石川三四郎	石川達三	石原 純	石本静枝
板垣直子	市川房枝	伊藤永之介	犬田 卯
井上友一郎	伊福部敬子	今村太平	岩上順一
岩崎 昶	巖谷大四	内田百閒	内山完造
宇野浩二	生方敏郎	江馬 修	円地文子
大木直太郎	大田洋子	大森義太郎	大宅壮一
岡田八千代	岡本 潤	小川未明	沖野岩三郎
荻原井泉水	小熊秀雄	尾崎一夫	尾崎士郎
尾崎行雄	小田獄夫	小野十三郎	折口信夫
海音寺潮五郎	賀川豊彦	片岡鉄兵	加藤悦郎
加藤勘十	加藤武雄	金子光晴	上司小剣
亀井勝一郎	唐木順三	川合 仁	河上徹太郎
上林 暁	菊池 寛	北原白秋	木村禧八郎
桐生悠々	草野心平	邦枝完二	窪川稲子
久米正雄	蔵原伸二郎	黒島伝治	古賀政男
小林秀雄	小堀甚二	小牧近江	小松 清
斎藤茂吉	坂本徳松	向坂逸郎	佐佐木信綱
佐藤春夫	里村欣二	塩田良平	四賀光子
洪川 驍	清水幾太郎	清水 崑	白鳥省吾
新明正道	杉山平助	千田是也	相馬御風
高嶋米峰	高橋新吉	高見 順	高村光太郎
竹内てるよ	武田麟太郎	武林無想庵	太宰 治
立野信之	田中惣五郎	谷崎精二	津久井竜雄
辻 潤	壺井 栄	壺井繁治	坪田譲治
東郷青児	十返 一	土岐善麿	徳田秋声
徳永 直	戸坂 潤	中島健蔵	中西伊之助
中野重治	中原中也	中村地平	中村武羅夫
中本たか子	新居 格	丹羽文雄	延島英一
萩原朔太郎	土師清二	長谷川如是閑	林 房雄
葉山嘉樹	春山行夫	平野 謙	平林たい子
広津和郎	福田清人	藤森成吉	舟木重信
舟橋聖一	船山信一	細田民樹	前田河広一郎
真杉静枝	松田解子	三木 清	水原秋桜子
宮本百合子	武者小路実篤	棟方志功	村岡花子
村雨退二郎	村松梢風	村山知義	望月 桂
望月百合子	矢崎 弾	保田与重郎	安成二郎
山川菊栄	山本有三	鏝田研一	横光利一
吉屋信子	淀野隆三	若山喜志子	

(五十音順)

◎関連年表

一九二五年	治安維持法・普通選挙法可決
一九二九年	川合仁、新聞文芸社を創立 (昭和四)
一九三一年	関東軍、柳条湖の満鉄線路を爆破 (満州事変始まる)
一九三二年	犬養首相暗殺(五・一五事件) 『プロレタリア文学』創刊
一九三三年	ドイツ、ナチス政権誕生 小林多喜二、虐殺さる 日本、国際連盟を脱退
一九三四年	桐生悠々『他山の石』創刊
一九三五年	新聞文芸社より『日本学芸新聞』 を発刊 美濃部達吉、天皇機関説のため 告発される
一九三六年	皇道派青年将校クーデターをおこす(二・二六事件) 日本学芸新聞社、独立して発行 元となる。一周年記念として『新聞と文芸』を語る座談会を開催 第一回「文芸・思想講演会」を 主催(戸坂潤・武田麟太郎・萩 原朔太郎・新居格・青野季吉・ 広津和郎など)
一九三七年	『日本読書新聞』創刊 正木ひろし『近きより』創刊 蘆溝橋事件(日中戦争の勃発) 矢内原忠雄『嘉信』創刊
一九三八年	国家総動員法公布
一九三九年	草野心平らと「詩の会」をつくる 第二次世界大戦始まる
一九四〇年	戦時統制のため、文芸通信社八 社が統合され「日本学芸通信社」 を設立
一九四一年	真珠湾攻撃(太平洋戦争勃発)
一九四二年	日本文芸中央会機関紙となる 日本文学報国会機関紙となり、 同会が発行所となる
一九四三年	一五五号を以て終刊、『文学報国』 に改題
一九四五年	敗戦

(ゴシックは本紙に関係あるもの)



↑「日本学芸新聞」創刊
一周年記念の座談会
「新聞と文芸」を語る」
右から 青野季吉・上泉
秀信・新居格・伊藤永之
介・田中惣五郎・川合仁
(一九三六年)

↓新聞文芸社主催「地方
文化についての座談会」
右から 邦枝完二・土
師清二・村松梢風・沖
野岩三郎・徳田秋声・
加藤武雄・浅原六朗・
川合仁(一九三五年)

↑日本学芸新聞社主催
「第一回文芸・思想講演
会」で講演する萩原朔
太郎。演題は「詩歌の
鑑賞について」
(一九三七年)

↑座談会「議会と翼賛会
はどうなるか」
右から 川合仁・田中
惣五郎・河野密・岩崎
英恭・赤松克麿・小山
亮・木原通雄
(一九四一年)

↓「講演と文芸映画の夕」
で講演する坪田譲治
(一九三九年)

↓小説『女の敵』の打ち合
わせ
右端川合仁、二人お
いて広津和郎
(一九三七年)



復刻版『日本学芸新聞』刊行概要

概要 1935(昭和10)年11月→1943(昭和18)年7月

全3巻
別冊1
付録1

第1巻(1～61号) 1935年11月～1938年12月
第2巻(62～99号) 1939年1月～1940年12月
第3巻(100～155号) 1941年1月～1943年7月

B4判／上製／総1,104ページ

序文 川合澄男 (学芸通信社社長・川合仁子息)

跋文 遠藤 斌 (評論家)

別冊 解説・総目次・索引 <別冊のみ分売可・本体価 2,000円>

付録 文芸思想講演集 (1937年10月15日刊、四六判・並製・82ページ)

解説 香内信子 (近代文学研究家)、香内三郎 (東京経済大学教授)

推薦 尾崎秀樹 杉野要吉
日高六郎 松尾尊兌 (五十音順)

本体揃価格 65,000円(分売不可)

関連図書＜復刻版＞ご案内

文学時標

第二次世界大戦敗戦直後に発刊された文学新聞。編集・荒正人、小田切秀雄、佐々木基一。戦争中における文学者の戦争責任を問い、文学の全的解放をうたった本誌は僅か13号という短命に終わったというものの、戦後の民主主義文学運動の先駆的役割を担った。

- ◎1946(昭和21)年1月～11月刊
- ◎B5判 上製 総80頁
- ◎全1巻(全13号を合本、付＝解説・回想・総目次・索引)
- ◎本体価 2,000円

戦争に対する戦争

日本最初、戦前唯一の反戦創作集。小川未明・金子洋文・黒島伝治・壺井繁治・武田麟太郎ら社会民主主義・無政府主義・共産主義・自由主義の作家たちがセクトを超えて集い、迫りくる戦争の姿を予感して描いた小説・戯曲・童話・シナリオ・詩など20篇を収録する。

- ◎1928年刊
- ◎四六判 並製 総426頁
- ◎解説 西田勝
- ◎本体価 2,800円

振替
FAX
TEL
東京
都文
京区
向丘
一〇二
一〇三
一〇四
一〇五
一〇六
一〇七
一〇八
一〇九
一〇一〇
一〇一一
一〇一二
一〇一三
一〇一四
一〇一五
一〇一六
一〇一七
一〇一八
一〇一九
一〇二〇
一〇二一
一〇二二
一〇二三
一〇二四
一〇二五
一〇二六
一〇二七
一〇二八
一〇二九
一〇三〇
一〇三一
一〇三二
一〇三三
一〇三四
一〇三五
一〇三六
一〇三七
一〇三八
一〇三九
一〇四〇
一〇四一
一〇四二
一〇四三
一〇四四
一〇四五
一〇四六
一〇四七
一〇四八
一〇四九
一〇五〇
一〇五一
一〇五二
一〇五三
一〇五四
一〇五五
一〇五六
一〇五七
一〇五八
一〇五九
一〇六〇
一〇六一
一〇六二
一〇六三
一〇六四
一〇六五
一〇六六
一〇六七
一〇六八
一〇六九
一〇七〇
一〇七一
一〇七二
一〇七三
一〇七四
一〇七五
一〇七六
一〇七七
一〇七八
一〇七九
一〇八〇
一〇八一
一〇八二
一〇八三
一〇八四
一〇八五
一〇八六
一〇八七
一〇八八
一〇八九
一〇九〇
一〇九一
一〇九二
一〇九三
一〇九四
一〇九五
一〇九六
一〇九七
一〇九八
一〇九九
一一〇〇
一一〇一
一一〇二
一一〇三
一一〇四
一一〇五
一一〇六
一一〇七
一一〇八
一一〇九
一一一〇
一一一一
一一一二
一一一三
一一一四
一一一五
一一一六
一一一七
一一一八
一一一九
一一二〇
一一二一
一一二二
一一二三
一一二四
一一二五
一一二六
一一二七
一一二八
一一二九
一一三〇
一一三一
一一三二
一一三三
一一三四
一一三五
一一三六
一一三七
一一三八
一一三九
一一四〇
一一四一
一一四二
一一四三
一一四四
一一四五
一一四六
一一四七
一一四八
一一四九
一一五〇
一一五一
一一五二
一一五三
一一五四
一一五五
一一五六
一一五七
一一五八
一一五九
一一六〇
一一六一
一一六二
一一六三
一一六四
一一六五
一一六六
一一六七
一一六八
一一六九
一一七〇
一一七一
一一七二
一一七三
一一七四
一一七五
一一七六
一一七七
一一七八
一一七九
一一八〇
一一八一
一一八二
一一八三
一一八四
一一八五
一一八六
一一八七
一一八八
一一八九
一二〇〇

不二出版

本カタログ中の表示価格は、全て消費税を含んでおりません。

※弊社は注文制です。お近くの書店へご注文ください。